

土からの手紙

畑のいまと、生産者の想いを綴った小さな読みもの。

土のこよみ



畑のひと

のらくら農場・萩原紀行さん。

ご機嫌で、畑に立つ。のらくら農場 萩原紀行さんのこと

高原の風がとおる畑で、萩原さんは「ご機嫌で仕事をしよう」を農場のテーマに掲げています。栄養価コンテストで最優秀賞を受けた野菜の背景にあったのは、技術の話よりも、人と土の付き合い方の話でした。

蕁麻疹が、畑へ連れていった

会社員のころ、三食をコンビニですませていた萩原さんは、全身に蕁麻疹が出るようになりました。薬は強くなるばかりで治らない。会社を辞め、農業の修行に入ると、ひと月ほどで症状は消えたそうです。早起きして汗を流し、三度きちんと食べ、夜は眠る。野菜が効いたのかはわからない、と本人は言います。

その規格は、誰が決めたのか

大きすぎるきゅうり、長すぎるいんげん。味は落ちていないのに、規格から外れただけで畑に捨てられる野菜があります。「この規格って誰が決めたんだっけ」と萩原さん。廃棄といえばお店のお弁当が浮かびますが、畑で捨てられる量のほうがはるかに多い。当たり前を決まりを一つずつ確かめ直さないかぎり、無駄は止まらないと考えています。

「怒るの禁止」の農場

のらくら農場には、怒るのを禁止する決まりがあります。我慢ではなく、必ずみんなで解決策を見つけようという約束です。ミスは必ず起きる。隠さず拾いあえば「なぜ起きたか」を一緒に検証でき、その人だけの失敗ではないと分かる。表記を変え、やり方を変え、仕組みが変わっていく。責める代わりに直す。

おいしさは、機嫌をよくする道具

機嫌よく生きている人は最強だと思う、と萩原さんは笑います。おいしさは、人を機嫌よくさせるひとつの道具。まわりの人のご機嫌まで考えられたら、子どもたちに「早く大人になれよ、世の中って面白いよ」と言えるはずだ、と。